2014 年度前期　授業評価アンケート結果に対するコメント
—社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長　古　川　良　治

評価項目 14 のうち、10 項目において 5 点尺度で 4 点以上を得ており、昨年度前期と比較しても概ね良い評価を得ていると考えられる。このうち、「教員は授業時間を有効に利用した(4.24)」、「総合的にこの授業を評価できる(4.20)」、「休講または教員の遅刻が多かった（得点を逆転させ、得点が高いほうが休講や遅刻が少ない評価となる）(4.19)」、「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた(4.19)」、「授業への教員の熱意を感じた(4.19)」では相対的に高い評価となっていた。

一方、4 点に達しなかった評価項目もあり、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった(3.83)」、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した(3.59)」、「教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった(3.99)」については、今後それぞれの教員が留意すべき事項であると考えられる。一方、「予習または復習をよくした(2.85)」について得点が低かったことについては、学生自身に授業に一層積極的に取り組んで欲しいと願うと同時に、予習や復習を促すような授業展開を検討することが望まれているのかもしれない。

また、「総合的にこの授業を評価できる」との相関係数が高かった上位 2 項目は「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」であった。この 2 項目はいずれも得点が 4 点に達していなかったものであることから、この 2 項目に特に留意した授業展開が必要とされているものと思われる。一方、相関係数が前 2 項目に僅差で続いていたのが「教員は授業時間を有効に利用した」「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた」「授業への教員の熱意を感じた」であり、これらの点については今後も引き続きこれまでの授業を維持していくことが望まれる。

いずれによせ、今回は前期の科目が対象となっており、通年科目、後期科目を含めた後期の授業評価アンケートがそろった段階で、改めて集計結果を分析・検討する必要があろう。